
早稲田大学蔵『助詞考』二種の比較考察

寺 田 智 美

1 はじめに

早稲田大学には中野柳圃の『助詞考』が二種、所蔵されている。『柳圃先生助詞考』（函架番号：文庫 8 B109、本稿ではA本と略称する）、『助詞考』（函架番号：文庫 8 C559、本稿ではB本と略称する）である。稿者はすでにそれら二種の翻刻を行っている¹が、翻刻作業をしていくにあたり、いくつか気づいた点があった。本稿では特に両者の異同に注目し、その比較考察をしていきたい。

2 早稲田大学蔵『助詞考』二種の位置づけ

まず、杉本（1976）の分類²によって、早大蔵『助詞考』二種の位置づけを確認しておく。

杉本は、『助詞考』を〈例〉〈目次〉〈文法解説〉の有無によって、以下のような三類五種に分類している。

項目 類	例	目次	本文 (単語・慣用句)	文法解説	備考
甲	○	○	○	×	
	○	×	○	×	
乙	○	○	○	○	A本
	○	×	○	○	B本
丙	×	×	○	×	本文はアルファベット順

A本の構成は〈目次・例・本文・文法解説〉³、B本の構成は〈例・本文・文法解説〉となっているので、早大蔵の二種はいずれも乙類に位置づけられることになる。

それぞれの書誌的情報については、拙稿（2001、2002）を参照されたい。

3 A本・B本の比較考察

3-1 A本の目次

まず、A本にのみ記載されている〈目次〉について、考察してみたい。

『助詞考』諸本の〈目次〉には、丁数を表示したものと各語彙に付された番号を表示したものとがあるという⁴。A本の〈目次〉の表示は翻刻を見ていただければわかるとおり、各語彙に付された番号を表示しており、その配列はアルファベット順⁵となっている。

では、この〈目次〉の「使い勝手」はどうなっているのでしょうか。本文の語彙に付された番号と比較した結果、18カ所の不適切な箇所が見つかった。

1 拙稿（2001、2002）参照。

2 杉本（1976）、326頁参照。同書では『助詞考』の内容そのものについて、早大以外に所蔵されている異本も含め、大変詳しい考察を行っている。

3 斎藤（1985）は、『助詞考』の構成について「中野柳圃による本書の多くは「例・目次・本文」の順になっているが、（中略）大垣の江馬庄次郎氏の蔵本は「目次・例・本文」となっていて、他の諸本と順序が異なっている。」（78頁）と述べている。この記述によると、江馬本は甲類に分類される写本であることがわかるが、目次の挿入場所については改めて諸本を比較する必要があるだろう。

4 杉本（1976）、327頁および330頁。杉本によれば、たとえば甲に分類される天理図書館蔵『柳圃和蘭助辞考』の目次は丁数表示になっているという。また、斎藤（1985）、78頁で紹介されている江馬庄次郎氏所蔵本『助詞考』も、丁数表示になっているという。

5 このアルファベット順の〈目次〉は、使い方としてはむしろ〈索引〉と呼ぶべきものであろうが、従来〈目次〉と称されてきているので、特に本稿では〈索引〉と言い換えることはしない。

- ① 本文の語彙番号が誤っているもの
- ・ A 6 ウ⁶「㊦ eerlang」(→「㊦」の誤り。「㊦」以降、番号が一つずつ繰り下がるべき)
 - ・ A 14 オ「○ zo」(→「㊦ zo」の誤り)
 - ・ A 39 ウ「㊦ te」(→「㊦ te」の誤り)
- ② 目次に付された番号が誤っているもの
- ・ A 目 2 オ「ingevolge 三」(→「三」の誤り)
 - ・ A 目 4 ウ「wel haast 𐄂」(→「𐄂」の誤り)
- ③ 目次の見出し語が誤っているもの
- ・ A 目 1 ウ「dan 𐄂」(→「dan of 𐄂」の誤り)
- ④ 目次にあって本文が欠落しているもの
- ・ A 目 1 ウ「der daar van 𐄂」(→本文見出し、例文とも欠落)
 - ・ A 目 1 オ「aldús ㊦」(→本文見出し「㊦ dús, aús, op deze wijze.」の見出しに欠落⁷)
 - ・ A 目 1 オ「als ㊦」(→本文見出し、例文とも欠落)
- ⑤ 本文にあって目次が欠落しているもの
- ・ 「en ㊦、㊦、㊦」
 - ・ 「rondom ㊦」
 - ・ 「minder niet ㊦」
 - ・ 「naaúwlijk ---of ㊦」
 - ・ 「niet minder ㊦」
 - ・ 「niet tegen staande ㊦」
 - ・ 「op deze wijze ㊦」
 - ・ 「wel zijn ㊦」

6 「A 6 ウ」の「A」はA本を意味する。以下、B本も同様に示す。

7 但し、B 14オの本文見出しでは「○ Dús, aldús, op dat wijze」となっている。

⑥ 目次に重複して見出しが立てられているもの

- ・ A 目 4 オ 「úitgezondered (㊦)」 (→「U」⁸「V」に重複して記載されている)

⑦ 目次の位置が誤っているもの

- ・ A 目 4 オ 「úithoofde (㊦)」 (→「U」の場所へ移動)

〈目次〉としては、実用的には十分に機能するものではあるが、それにしても細かい誤りが多く、やや杜撰な印象があることは否定できない。ただ先にも述べたとおり、〈目次〉の表示法が諸本によって異なっていることから考えれば、書写の元となった草稿自体に〈目次〉がついていたわけではあるまい。A 本の目次は書写した人物——吉雄俊蔵か——があくまで私的に使うために作成したものであると考えるべきだろう⁹。

3－2 A 本「㊦ Alleen」部分の例文列挙の順序

すでに拙稿（2002）でも述べたが、A 本と B 本を比較してみた結果、例文列挙の順序が大きく異なっている部分が見つかった¹⁰。A 本の本文では「㊦ Alleen」に対し、[A 1 ウ] から [A 6 ウ] に渡って合計33種の例文および各々の訳文を挙げているが、B 本では以下に示すような順で列挙されていたのである。

（ ）内の丸数字は項目番号、-（半角ハイフン）の後の数字は例文の通

8 なお、〈目次〉には「U」が見出しとして立てられていない。

9 杉本（1976）はA本が吉雄俊蔵の書写であるということの根拠として、

①本文中に羽栗費（発）＝吉雄俊蔵をうかがわせる〈費〉、および〈発〉という人物名が見えること

②料紙の版心に吉雄の用箋であることを示す〈観象堂〉という文字が見えること

③〈帙〉に「吉雄常三写」と見えること

を挙げている（329-330頁）。また、杉本はA本の目次を「もとより吉雄がこの目次を作った」と述べている（347頁）。

10 拙稿（2002）、62頁。

し番号¹¹を示す。また、次節で取り扱うことではあるが、A本にはなくB本だけに記載されていた箇所は網掛けで示した。

[B 4 オ]

- ・㊦ alleen dit hóut is goed, om te branden. (A 1 ウー③-1)

唯此木焼クニ宜し 外ニハ何事モナシ
又他木ハシカラスノ意

- ・㊦ alleen dit hóut zal Eeúwig blijven. (A 2 オー③-2)

唯此木永く住らん

[B 4 ウ]

- ・㊦ Niet alleen dit hóut is goed om te branden. (A 2 オー③-3)

唯此木のミ焼に宜シキにハならず 他木モ焼ニヨシノ意

- ・㊦ Niet alleen dit hóut zal Eeúwig blijven. (A 2 オー③-4)

唯此木のミ永住せんにはならず

niet alleen dit hóut, maar alle andere hóuten zijn ook goed ノ意

- ・㊦ Alleen dit hóut is niet goed om te Branden. (A 2 オー③-5)

唯此木のミ焼ニ宜しからず

[B 5 オ]

- ・㊦ Alleen dit hóut □al niet Eeúwig blijven. (A 2 ウー③-6)

唯此木のミ永住せさらん

alleen dat dit hóut goed om te branden is ナド、voegende wijze ニ□

ルハ此木焼ニ宜□きのミト訳ス

Dit hóut Zal alleen niet Eeúwig blijven.

此木永住せさらんのミ是モ左ノ如シ

- ・㊦ Dit hóut alleen is goed om te branden. (A 2 ウー③-7)

此木のミにて焼ニ宜し 他木ヲ雑フへからず

- ・㊦ Dit hóut alleen Zal Eeúwig blijven. (A 2 ウー③-8)

11 A本の「三 Alleen」の例文には通し番号はついていないが、私に始めから順に通し番号をつけて考察した。

此木のミ永く住らん

VN ニカ、ルモノ人事ニワタラヌモノハのミにてトハ訳シ難シ此木のミにてナドハ人ガ木ヲ焼ク上ニテ云フ故のミにてト訳スヘケレト永住□トハ人事ニワタラザル故ひとりト訳ス又 VA ニカ、ルモノハ皆のミにてト訳スヘシ但シのミにてト言ハ俗語ニテ一切ニのミト云フノ雅語ナラン

[B 5 ウ]

- ・ Een leeúw alleen kan geheele leger aantasten. (A 5 ウー③-26)

獅子^{ヒトリ}一疋にて一隊ノ軍勢ニかゝる 但シのミにてト同意

- ・ Een alleen springt ligt (A 5 ウー③-27)

一^{ヒトツ}木にては飛び易し

骨ヲ二本連ネテ切り易キ事ヲ云ヤハリひとりての意ナリ springen

VN ナレト様ニてはヲ附テ訳スルヲ前ニ云ルガ如シ

- ・ ㊦ Dit hóút alleen is niet goed om te branden. (A 3 オー③-9)

此木のミにてハ焼に宜しからず 他木ヲモ雑フベシ

[B 6 オ]

- ・ ㊦ Dit hóút alleen Zal niet Eeeúwig blijven. (A 3 ウー③-11)

此木のミは永く住せず 他木ハ皆永住ス

- ・ Een alleen springt niet ligt (A 5 ウー③-28)

一本のミにてハ飛び難し

二本ニテモ三本ニテモ夫レハ飛び易し 獅子ノ語ナトモ準シ知ルベシ

- ・ ㊦ Dit hóút is alleen goed niet om te branden (A 3 オー③-10)

此木のミにて焼に宜しきにはあらず 他木モヨシ

- ・ ㊦ Dit hóút zal alleen Eeúwig niet blijven. (A 3 ウー③-12)

此木のミ永住するにはあらず 他木モ永住スにてヲ附サルヲ前ニ見ユ

[B 6 ウ]

- ・ Een springt alleen ligt niet (A 5 ウー③-29)

一本のミにて飛び易き^ニにあらず

- ・ Een Leeúw kan geheel leger alleen niet aantasten. (A 5 ウー③-30)

獅子一疋にて一隊の軍勢にかゝる事能ハス

前ノ二語ハ ADJ. ニカ、リ是語ハ動詞ニカ、ル故ニ使ヒ方異ナリ前ノ dit hout

alleen ハ noemer. ニ附リ右ニアルハ他ノ諸格ニ附リ

- ・ ㊦ Hij zoekt zijn voordeel alleen. (A 4 ウー③-19)

彼人其身の利のミを求む 人ノ事ハ思ハスノ意

[B 7 オ]

- ・ ㊦ In Dit landschap alleen woonen tien dúizend mensen.

(A 4 ウー③-20)

此州中にのミ一万人住めり 是外ノ州ニモ各々住人有リ

- ・ ㊦ Hij zoekt zijn voor deel alleen niet (A 4 ウー③-21)

彼人其身の利のミを求めず 人ノ為ヲモ思フノ意

- ・ men moet voor zig alleen niet leven (A 4 ウー③-22)

己れのミの為に渡世することなかれ

- ・ ㊦ Tien dúizend mensen woonen in dit landschap alleen niet

(A 5 オー③-23)

一万人此州中のミ住にはあらず

Niet in dit landschap alleen woonen tien dúizend mensen.

此州のミならで惣而一万人住めり

[B 7 ウ]

- ・ ㊦ Dit hóut is alleen niet goed om te Branden. (A 4 オー③-18)

此木は焼に宜しからざるのミ

- ・ ㊦ Dit hóut zal alleen niet Eeúwig blijven. (A 4 オー③-17)

此木は永住せさらんのミ

- ・ De leeúw wil geen leger alleen aantasten. (A 6 オー③-31)

獅子一軍のミにかゝる事を欲せず

前ナル語ノ aleen. ハ獅子ニカ、ル此ニテハ軍ニカ、レリ

Niet alleen in dit landschap tien dúysend mensen woonen.

此州中ニ一万人住のミにあらず ㊦

[B 8 オ]

- ・ In dit landschap woonen alleen tien duyzend menschen.

(A 5 オー③-24)

此州中ニ一万人住むのミ

- ・ In dit landschap woonen tien dúizend menschen alleen. (A 5 オー③-25)

此州中に一万人のミ住めり 唯一万人ニテ外二人なしノ意

是ハ(四格)ナリ但第(一格)ニ附セル dit hoút alleen zal Eeúwig blijven. ノ

語ノ類ナリ

- ・ (㊦) Dit hoút is alleen niet goed om te branden (A 4 オー③-18)¹²

此木は焼に宜しからさるのミ

[B 8 ウ]

- ・ Dit hoút zal alleen niet Eeúwig Blijven. (A 4 オー③-17)¹³

此木は永住せさんのミ

- ・ ik kan dat aleen niet doen. (A 6 オー③-32)

我是のミにてハ為る事能す

- ・ ik kan niet dat aleen d□□n. (A 6 ウー③-33)

我のミにてハ是を為る事能ハす 是等ハ geen ト云詞ヲ用ル事能ハす

- ・ (㊦) Dit hoút is alleen goed om te branden (A 3 ウー③-13)

此木は唯焼に宜しきのミ 他事ニハヨカラズ

- ・ (㊦) Dit hoút zal alleen Eeúwig blijven (A 3 ウー③-14)

此木は唯永住せん□ 別事ハナシ其外 Een springt alleen ligt ナトモ皆外ニ

ハ何事モナキヲ云フ

[B 9 オ]

- ・ (㊦) Dit hoút is niet alleen goed om te Branden. (A 4 オー③-15)

此木唯焼に宜しきのみならず 外ニモ事アリ

- ・ (㊦) Dit hoút zal niet alleen Eeúwig blijven. (A 4 オー③-16)

12 [B 7 ウ] にも同じ例文が重複して掲載されている。

13 [B 7 ウ] にも同じ例文が重複して掲載されている。

此木永住さんのミならず 外ニモ事アリ是事前ニ見タリ又獅子ナドノ語モ準
シ知ルベシ皆 niet alleen ト云フ

例文列举の順序が異なっている理由として、書写者に何か意図があつて
そのような順番で写したか、単なる写し間違いかということが考えられる
が、前後の例文の関連性を見た限りでは、明らかにA本の方が整っている
という印象を受ける。もし、B本の書写者が何らかの理由で写し間違いを
したのだとすると、そこにはどのような要因があつたのであろうか。

B本の例文はA本の例文の通し番号によれば、

1-2-3-4-5-6-7-8-26-27-9-11-28-10-12-29-30-19
-20-21-22-23-18-17-31-24-25-18-17-32-33-13-14
-15-16

のように並べられていたわけだが、前後の例文の関連という視点からすれ
ば、ここに12（重複している例文も数えれば13）のブロックが見えてくる。

(1-2-3-4-5-6-7-8) - (26-27) - (9-11) - (28) - (10-12) - (29-30)
- (19-20-21-22-23) - (18-17) - (31) - (24-25) - (18-17) - (32-33)
- (13-14-15-16)

A本の例文列举の順序が正しいとすれば、B本は本来は□数字で示した
ブロックの順番で書写されるべきであつたということになる。

①(1-2-3-4-5-6-7-8) - ⑧(26-27) - ②(9-11) - ⑨(28) - ③(10-12)
- ⑩(29-30) - ⑥(19-20-21-22-23) - ⑤(18-17) - ⑪(31) - ⑦(24-25)
- ⑤(18-17) - ⑫(32-33) - ④(13-14-15-16)

ブロック番号だけで示せば、

①－(⑧)－②－(⑨)－③－(⑩)－⑥－⑤－(⑪)－⑦－⑤－(⑫)－④

のようになり、全体的に見れば①～⑦ブロックの中に⑧～⑫ブロックが挿入されている様子がうかがえる。並行して書写してしまったのであろうか。また、仮に重複して書写されている⑤ブロックの始めの方を誤写とすると、⑥～⑦ブロックは④～⑤ブロックの前に書写されているだけでなく、④～⑤ブロックでも逆に書写されるということが起こっていることになる。

この部分以降、A本とB本とでは書写の順序に違いがないことから、少なくともこの部分に関しては、書写者が何かしらの意図をもって並べ替えたのではなく、書写の元となった草稿が綴じられていなかったなどの理由で、草稿の順序の確認をしないまま、書写されてしまった可能性が高いのではないかと考えられる。

3－3 B本の錯簡

3－2と同様、すでに拙稿（2002）でも述べたことであるが、B本には錯簡と思われる部分があった。問題となる部分の前後は、以下のようになっている。（ ）内の丸数字はA本の項目番号を示す。

[B 4]

○ Alleen (A－①)

○ alleen, alleenlijk (A－②)

[B 4～9]

凡ソ alleen ハ唯ノ意ナリノミモにてモひとりにてモ訳ス

(A－③ 1～33)

[B 9]

○ Alleenig, alleen (A－④)

- In zo verre, in zo verre dat…… (A－⑤)
- Eerlang (A－⑤)
- Naardien, dewijl dewijle, nademaal, vermits, mitsdien (A－⑥)
- omdat, door dien, om rede van (A－⑦)

[B10]

- De reden door (A－⑩と思われるが、A本本文には欠落している)
- maar (A－⑪)
- maar (A－⑫)
- maar, mits (A－⑬)

[B11]

- mits (A－⑭)
- Dog, doch (A－⑮)
- Echter, nogtans, niet te min (A－⑯)
- het zij (A－⑰)
- het zij …… of (A－⑱)

[B12]

- hoe, het ook zij (A－⑲)
- Evenwel (A－⑳)
- Zoo dat (A－㉑)
- zoo……dat (A－㉒)

[B13]

- dat, ten Einde dat (A－㉓)
- weegens (A－㉔)
- daar om, om die reden (A－㉕)
- Derhalven, bij geovolg, overzúlks (A－㉖)
- ingeolge, út hoofde (A－㉗)
- gevolglijk (A－㉘)
- waar door (A－㉙)

○ want (A－⑮)

[B14]

○ Dús, Aldús, op dat wijze (A－⑲)

○ als, gelijk (A－⑳)

○ als (A－㉑)

……これ以降、順番通り。

A本の語彙番号をたどっていくと、明らかに[B13]の位置が不自然であることがわかる。普通に考えれば、[B9]の次に挿入されるべき丁であったといえよう。

この錯簡はどの時点で起きたものかはわからないが、少なくとも書写した段階では[B9]－[B13]－[B10]の順であったと考えるべきであろう。

3－4 B本によってA本の補足が可能な箇所

杉本はB本について、「本文では〈乙1〉の誤写などを訂正できるいい点がある」と述べている¹⁴。確かに今回、両者を比較してみて、大きな異同が多いという印象を持った。

以下、B本によってA本を補足できる箇所のうち、主なもののみ網掛けで示す¹⁵。なお、[B9オ]まではすでに3－2で示したので、そちらも合わせて参照されたい。

[B9ウ] (異同箇所なし。)

[B10オ]

○ De reden door 上ニ同シ

○ maar (中略) 愛する事ちと過分なり 但シト訓シテモ宜シ

[B10オ～ウ]

14 杉本(1976)、330頁。〈乙1〉は本稿でいうA本のこと。

15 単純な誤写と思われる部分は省略した。

○ maar (中略) Het is maar om te lagchen それはた、笑んが為なり

[B11ウ～12オ]

○ het zij……of (中略) 寝たるにもせよ起たるにもせよト□宜シ文にヨリテハ先ツ het zij トアリテ紙半枚バカリ隔テ、 of トウケタルモアリ心ヲツクベシ (略)

○ hoe, het ook zij 如何はかり○共ト訓ス

het schoon het ook zij 如何はかり美なることも

hoe sterk zij ook mogen zijn. 如何はかり彼等強キ事を得るとも

[B15オ]

○ als た、又のミト訓ス

geen verbetering gemaakt dan die hoog nodig was か様ノ dan ヲ als 臣言
リ其時ハ読下シニシテ唯ト訳ス又ハ was ヨリ反テのミ臣訳ス

[B15ウ～16オ]

○ maar 是ハ前ニ出セル然れともト訓スル

maar ナリ此 maar ノ下ニ niet ヲ帶ル時ハ maar ヲ上ノ句ニ附ケテこそト訓ス
前ニ云ヒ落セリ故ニ茲ニ出ス (略)

[B16オ～ウ]

○ Zoo……dat 如くト訓ス

Zoo gek als men denkt. 人の思へる如くニ痴なり (中略)

voor zoo Een onkúndigen man als ik den. 我如く不才なるものに於て

○ zoo als にありてト訓ス (中略)

我彼家を過るにありて (略)

[B17オ]

○ als ばト訓ス 但シ過去ノばナリ是ハ wanner ニ同シ (略)

[B18オ]

○ zoo……als も○もともにト訓ス

前ニアル zoo……als ハ zo ト als トノ間ニ必ス静虚詞ヲハサメリ此ハ必シモシ
カラズ

Daar stierven 'er tien dúizend, zo door het zwaart als door de honger.

彼処には一万死す刃によるも飢によるも共にして

[B20ウ～21オ]

○ Indien, bij aldien als. ばト訓シ又もし○ばト訓ス

未来ノばナリ大概 als ニ同シ (中略)

右ノもしハもしもかうともならばト云フ意ナリもし死たる者が再び来るならばナトノ類ナリ仮令ノ詞ナリたとひ○ばト訓センモ可ナラン過去ノ時ハ
彼人もし家に在なれば彼人家にあらましかばナト、訳スヘシ (略)

[B26ウ]

○ deselve, 't zelve. それトおなしト訓ス

皆しきに其もの、何じやじきにそれじやノ意ナリ但シおなしト訓スル外ハ皆
カロキ詞ナリ

hij zelve 陽 zij zelve 陰 dat zelf 中 zij zelve 復
wij zelve 復 (略)

[B28ウ]

○ liever.....als, liever als. ^{ムシロ}寧也

よりは中々にト訓ス

Liever trouwen als branden. 煩惱せんよりは中々に婚せん 婚合し難
き道理はあれともト云フ意アリ

[B29オ]

○ of liever ともいはまほしト訓ス (略)

[B31オ]

○ ten deele, onvolmaaktelijk. 未成未満ノ辞ナリ

此時ハ多ハ上ニ maar ト言フ詞アリテ ten deele モ唯一ツ□□リ

[B33ウ]

○ om, aan をト訓シ又にはト訓ス (中略)

om iets denken. ものを思ふ

[B35ウ]

○ of もト訓ス

of hij kwaad is of niet, **daar is niet** aangelegen. 彼人怒らんも然さら
んも爰に於て拘ることなし

[B36オ]

○ of ○必ト訓ス

夫ノ人不レ言ハ言ヘハ必有リ中ルヲ焉ノ意

De waar zegster zijde tot loúw, dat hij niet út de Cirkel wijken, of
dat hem de droes aanstúkken scheúren. (略)

[B39オ～39ウ]

○ mogelijk 或はト訓ス

疑ノ辞オシハカル辞助詞ニ用ユル時 mogelijk zal hij zeggen ナト彼人云フデア
ラウト推ハカル也

[B42ウ～43オ]

○ De.

一言ノ末ニ附タル de 二義アリ名ニカ、ル時ハ苗字ニナル也動詞ヲ静活詞ニナ
ス意ナリ (中略) Een N:, zijnde....., is..... ナトノ類ナリ

[B46ウ]

(図の下方) ^ヲ^ウ 生へ植へ

[B53オ]

○ hebben. (中略)

有ノ意 | **既ノ意** **有ノ意ナリ**

[B55ウ]

○過去 独 実詞ニカ、ル時ハ有ノ字ノ意

ik heb **gij hebt** **hij heeft** **zij heeft**

衆

wij hebben **gij l. hebben** **zij hebben** 男女

(heb
hebben) トモ云フ

[B55ウ～56オ]

○**過去** 独 過去詞又仮令ニ用フ

(中略)。

zij zouden. 男女ヲ

[B56ウ]

○ zig 3 deperzon. 男女独衆自ヲ又自ニト訓ス

zelf ^{ミ□□ヲ}
自

[B58ウ]

○ f. faminiúm. vrouwelijk

これらの欠落箇所を見ると、A本では例文中の単語が部分的に欠落していたり、途中で切れてしまっているものが多いことがわかる。例文内の欠落については虫損も疑ったが、もともと「写されていなかった」箇所がほとんどであった。同様に、例文と訳文がそっくり欠落している箇所や、訳文を割愛している箇所も多かった。書写者がすでに理解している例文であったからか、それとも後で例文を完成させようと思ったのかは定かではない。しかしこれだけ欠落箇所が多いと、書写者が自ら内容を取捨選択して写していたのではないかという可能性すら生じてくる。

ただ、A本の欠落部分をB本で完全に補足しうるかといえ、そうでもないようである。例えば、[B10オ]の「○ De reden door 上ニ同シ」は、A本の目次にだけ記載されていた「der daar van 十六」の本文だと思われるが、〈目次〉とは見出しが一致しておらず、果たしてこの部分が本当に「十六」であったのか、という疑問が残る。

また、B本の書写者個人の書き入れもいくつか存在していると思われるが、A本との比較だけでは特定することはできない。

3-5 A本によってB本の補足が可能な箇所

3-4と同様、主な箇所のみ挙げる。網掛け部分がA本にあって、B本に欠落していた箇所である。

[A 1 オ]

(野外)

凡動詞ニき、シヲ履スレハ過去也虚詞ニ履タルハ現世ナリ△手枕のすき
間の風も寒かりき身ハならわしの物にぞありける△みどりなるひとつ草
とぞ春は見し秋ハいろ／＼の花にぞありける△我宿は雪ふり敷て道もな
しふミ分てとふ人しなければ△のこりなくちるぞめて度桜花

[A 2 ウ]

○ alleen dit hoút zal niet eeuwig blijven. 唯此木のミ永住せざらん

③ alleen dat dit hoút goed om te branden is ナドハ voegende wijze ニイヘルハ此木焼ニ宜しきのミト
訳ス他ノコニハ役ニ立ヌ意アリ

[A 3 オ～ウ]

○ dit hoút is alleen goed niet om te branden. 此木のミにて焼に宜しきに
はあらす

他木モ | 此木焼に宜しきのミにはあらず焼にもよひが其他ニモ用ユ
ヨシ | ルノ意ナルベシ⑥ノ文ト焼ニハ宜カラサレ他のコハ否ノ意

[A 3 ウ]

○ dit hoút zal alleen eeuwig \emptyset blijven. niet 此木のミ永住するにハあ
らす

他木モ永住すにてヲ | dit hoút alleen トアラハ此訳ニテ通スベシ本文ノ如キハ此
附サルコ前ニ見ユ | 木永住するのミならずラント云テ他ニモ用アリノ意アラン

[A 4 オ]

○ dit hoút zal niet alleen eeuwig blijven

此木唯永住せんのみならず 外ニモ
事アリ

dit hoút zal niet alleen eeuwig blijven. 此事前ニ見ヘタリ又獅子ナト
ノ語モ準シ知ルベシ皆 niet alleen ト云フ

○ dit hoút zal alleen niet eeuwig blijven. 此木永住せんのみならず

[A 5 オ]

○ tien dúizend menschen woonen in dit landschap alleen niet. 一万人此
州中にのミ住にはあらず 一万人此國中ニノミ住ムニ非ス
其一万人ノ内半ハ他國ニ住ム

[A 5 ウ]

○ een leeúw alleen kan geheele leger aantasten. 獅子一疋にて一隊の軍

勢にかゝる 一疋ノ獅子ノミ
一隊ノ軍勢ヲ

[A 6 オ]

○ de leeúw wil geen leger alleen aantasten. 獅子一軍のミにかゝるものを欲せず

他軍ニモカ、ラント欲ス前ナル語ノ aleen ハ獅子ニカ、ル此ニテハ軍ニカ、レリ

[A 8 オ～ウ]

㊦ maar. たゝとも訓シ又のミに訓ス

(中略)

weest maar niet verlegen. 唯迷惑することなかれ

右ノ如ク下知ノ詞ニ用ユル 此ハ俗ニハ下知ノ詞ノ助ケノ如クナル

「モ」ノミニ用フ

[A 14 ウ～15 オ]

㊦ al. ともト訓ス但シ未来ニ用ルカ故也

(中略)

al is hij ouder dan ik. 費曰此条ノ訳ヲ欠ク恐クハ彼人たとい
我より老たりともト云ヒテ当ランカ

[A 20 オ]

㊦ of ten minsten 費曰原訳落タリ | 然らずとも何とせんト訳スベキカ

[A 28 ウ]

㊦ eigenlijk zogenoemd.

(中略) 又御畿内五ヶ国ノ一ヲモ大和ト言フ其畿内ノ大和ヲ爾云也惣

名ノ大和和ト混センヲ恐ル、時ノヲ也

[A 28～29 ウ]

㊦ om zo te spreken. いはゞト訓ス

(中略) 言ハゞト訓ノ可也甲セリとも言ベシトの意 本文木分的
当ナラス詞

[A 39 オ～ウ]

㊦ te. om te. ト連ル時二義アリ上動詞ヲ受ル時ハべきが為ト訳ス te ヲ

べきがト訳ス

(中略) om met hem te spreken. om te ヲ別テリ 発按ニ彼人と談ずべきが為ト訳スベシ

[A40オ]

㊦ te. よりト訓ス 動物ニカ、リ道路ニカ、ル

te voet, te paard, ter zee, te land. | マーリンニハ hij rijst te voet, te paard, te post, ter zee ナド云也 (略)

[A41ウ～42オ]

㊦ den. 是モ発声ノ詞也 (中略)

van de vader. 父の den heemel eeren. 天を敬ふ

天を敬ふ

右ノ den ハ mannelijk naam ニカキリテツクナリ

[A44オ]

(図の上部) 虚詞カ実詞ニナルモノ所謂 schoon hijd ノ如キラ云

(図の左部) 陽中陰ナルベシ

(図の下部) 動詞ヲ実詞ニ用ユルモノ srijding ナドノ如シ

[A45オ]

(図の右上部) 動他詞也

(図の右下部) 自動詞也

[A48オ]

自動 ウゴク詞

heid. 静活 | werkende werkwoord.

[A48ウ]

是ハ de, het. ノ例ニ準ス

den. 雄

但 lydelijk geval. 又ハ van den ノ時

[A51オ]

geweest waaren. gehad hadden. 此二語ハ過去ノ過去ナリ

om dat hij 恐ラクハ maar ナラン waar een penning gehad hadden. 彼人唯一錢有シカハ モチテヲリ

[A52オ]

zijn. ^{ニアリ}在ナリ因テナリ也ニモ当ルニアリノ ハ
也ナレハナリ時ニ因テナリ^レナレ^レ誤ス

[A52ウ]

zoúden. (中略)

応ノ意 ^{間ニ用ル時ハ多クハ意反スル時ニアリカハ}
^{ヤハナドノ類ナリ仮令ノ時ハマシト訓ス}

[A57オ]

○ gem.spr.

gemeene zaame spreekewijze.

○ gem.of gemeen w.

gemeen woord.

全体の傾向として、A本がB本を補足できる箇所はB本がA本を補足できる箇所ほど多くはない、ということがいえそうである。例えば、[A1オ]の罫外に書かれている「凡動詞ニき、シヲ履スレハ過去也虚詞ニ履タルハ現世ナリ△手枕のすき間の風も寒かりき身ハならわしの物にぞありける△みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋ハいろ／＼の花にぞありける△我宿は雪ふり敷て道もなしふミ分てとふ人しなければ△のこりなくちるぞめて度桜花」、[A14ウ～15オ]の「費曰此条ノ訳ヲ欠ク恐クハ彼人たとい我より老たりともト云ヒテ当ランカ」、[A20オ]の「費曰原訳落タリ然らずとも何クせんト訳スベキカ」、[A28～29ウ]の「発按ニ彼人と談ずべきか為ト訳スベシ」のような箇所は、吉雄俊蔵個人の書き込みと考えられ¹⁶、草稿には記載されていなかった箇所であろうと思われる。

ただ、ここで網掛けで示した箇所がすべて吉雄俊蔵の書き込みであるとは、当然断定できない。中にはB本の書き落としもいくつかあると思う。そのあたりの判断は、他の写本との詳細な比較検討の結果を待つ必要があるだろう。

16 杉本(1976)は「この欄外はおそらく吉雄常三(俊蔵)が書き入れたものかと思う」と述べている(344頁)。

3-6 A本とB本とで内容が異なる箇所

最後に、単なる誤写ではなく、内容の違いに関わると思われる異同箇所について、そのいくつかを挙げておく。また、参考までに（ ）内に前後の文脈から判断してどちらが適切であるかを記した。波線は稿者が付したものである。

[A 4 ウ]

- Hij zoekt zijn voor deel alleen niet. 彼人其身の利のミを求む (→求めす [B 7 オ]、Bが適切)

[A 8 ウ]

- ⊕ maar, mits. たにト訓スさへノ意又苟ノ意也
als gij maar zwiigd 汝黙止たにせん (→ば [B 11 オ]、Bが適切)

[A 9 オ]

- ⊕ mits ^{モトヨリ} 勿論ト固ト訓
汝黙止たにせず (→ば [B 11 オ]、Bが適切) トイフモ勿論黙止ハせねハならずト言フ意アリ
- ⊖ dog, doch.
とも又然なり (→るに [B 11 オ]、Bが適切) 又然れともト訓ス maar ヨリハ少シ重シ

- ⊖ echter, nogtans, niet temin.
猶又さる物から又それとも (→それでも [B 11 オ]、Bが適切) ト訓スやはりと云意也

[A 9 ウ～10 オ]

- ⊕ hoe — hoe (→ het [B 12 オ]、Bが適切) ook zij
- ⊖ evenwel. 猶も訓ス但シ前ニアル nogtans ト同意やはりト意得ル所多クさるお (→物から [B 12 オ]、Bが適切) されともナトノ意ナルハスクナシ (略)

[A 10 ウ]

㊦ dúš, aús (→ Aldús [B 14オ]、Bが適切)、op deze (→ dat [B 14オ]、A Bとも適切) wijze. しかへト訓ス

dúš, won den zij de vijanden in een groote verlegent hijd.

敵軍しかし (→しかへ [B 14オ]、Bが適切) 大周章の中にあり

[A 12ウ～13オ]

㊦ zoo — als (→ dat [B 16オ]、Aが適切) 如くト訓ス

㊦ zo als. にあたりて (→にありて [B 16ウ]、Aが適切) と訓ス (略)

zoo als ik zijn hús voor hij (→ bij [B 16ウ]、Bが適切) kwaam.

彼家を にあたりて (→我彼家を過るにありて [B 16ウ]、Aが適切)

(略)

[A 19オ～ウ]

㊦ ten minsten. (中略)

eet ten minste een stúk eer je gaat 汝が行ク前に一嚮なりとも (→をだに [B 23ウ]、Bが適切) 喰へ 一切レなりともト言フ意也

[A 22ウ～23オ]

㊦ dezelfde, 't zelve. それに_レおなしに_レ訓ス (中略)

god is de goedhijd zelve / zelve は (中略) 但シ何レモ_レ国 (→も [B 27オ]、Bが適切) ト訳スル時ノ事ナリ (略)

[A 24ウ～25オ]

㊦ liever als. ^{ムシロ}寧也 (中略)

liever trouwen als dúš gehoord te zijn. かく辱られたらんよりハやく (→中々に [B 29オ]、Bが適切) に死なん

㊦ veeleer. 大概 liever als ト同意ナレに_レ欲ル意ニハアラズ都_レテ (→却テ

[B 29オ]、Bが適切) ト訳スベシ integendeel は是ニ反_レト訳スベシ

[A 43オ]

○ niet zo zeer op — gelet als om cieraad te dienen.

左のミ肝要にハならて唯にか_レさり (→侍り [B 45オ]、Bが適切) ニなるはかりなり

前後の文脈——見出し語が例文に含まれているか、見出し語の後に書かれている訳語が例文の訳と合っているか、など——から判断すると、上に挙げた箇所のは大半はB本の記載の方が適切ということになる。確かに、中にはA本の方が適切に記載されていると思われる箇所や、どちらが適切か判断しづらい箇所もある。しかし、書写の正確さという観点からすれば、B本の方が正確に草稿を写していると考えられるのではないだろうか。

4 おわりに

以上、早大蔵『助詞考』二種の比較考察を行ってきた。これらの比較によってわかったことをまとめると、次のようになる。

- B本は前半部分に書写の順序が錯綜している箇所がある。
- B本には明らかな錯簡が1丁ある。
- A本はB本よりも書写の欠落箇所が多い。但し、書写者が意図的に欠落させた可能性もある。
- A本には書写者の書き込みと思われる箇所がある。
- B本の方がA本よりも正確に書写されている可能性が高い。

稿者は本稿において、どちらの写本の方がより「元」の草稿を忠実に写しているか、あるいはどちらの写本が優れているかなどという結論を出すつもりは毛頭ない。確かに一つの作品の異本を比較検討していくことは、ある意味でその作品の「元」をたどる試みでもあると思う。しかし、『助詞考』を写す目的は、書写者によって大きく異なっていたのではあるまいか。ある者は「自らの蘭語学習のため」にわかっている箇所は飛ばして写したかもしれないし、ある者は「忠実に、そのままを写そう」と考えたかもしれないのである。

『助詞考』二種を比較するための一連の作業をしていく過程で、浮かび上

がった両者の違いには、A本とB本の書写者の「蘭語学に対する姿勢」や「個性」が映し出されているといつてよいだろう。

【参考文献】

- 斎藤 信 (1985)『日本におけるオランダ語研究の歴史』大学書林
杉本つとむ (1976)『江戸時代蘭語学の成立とその展開—長崎通詞による蘭語の学習とその研究—』早稲田大学出版部
寺田智美 (2001)「翻刻『助詞考』(一)」早稲田大学図書館紀要48
——— (2002)「翻刻『助詞考』(二)」早稲田大学図書館紀要49

(てらだ ともみ 早稲田大学日本語研究教育センター助手)